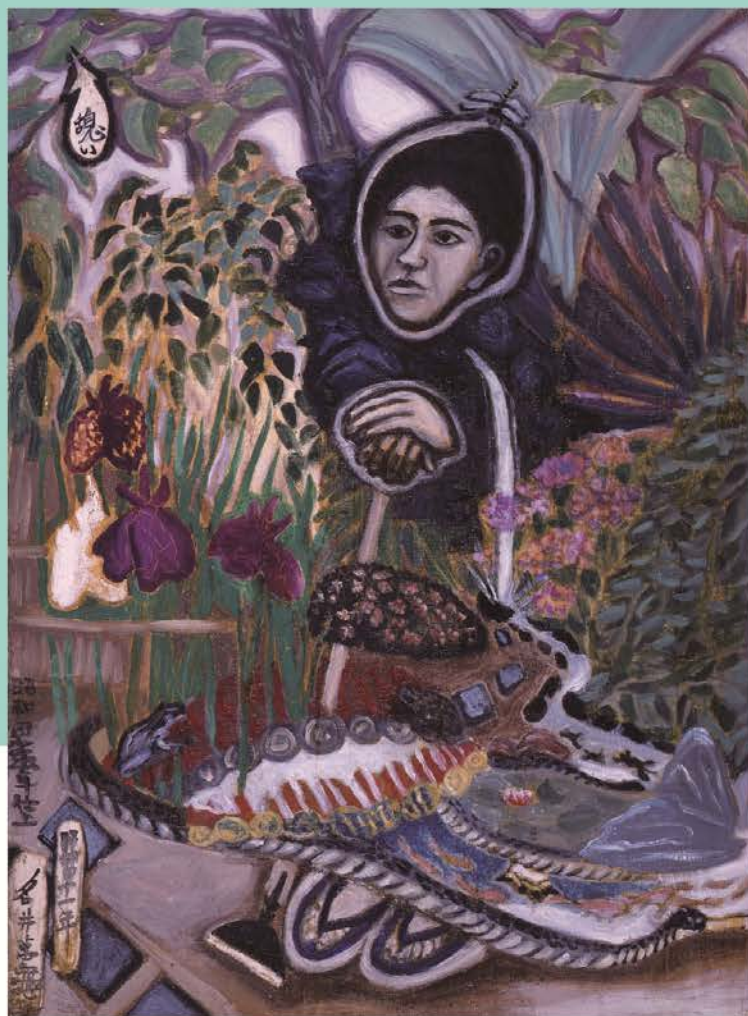


COLLECTION EXHIBITION

Summer at the Museum: The Seven Wonders of the Art Museum



名井萬亀《七不思議》1970年

夏の所蔵作品展

サマーミュージアム

美術館の七不思議

2019年7月3日(水)～9月23日(月・祝) 2階展示室

[開館時間] 9:00～17:00 (金曜日は20:00まで開館) ※入場は閉館の30分前まで

[休館日] 7月8日、8月26日、9月2日、9月9日 [所蔵作品展休室日] 8月19日

[入館料] 一般510(410)円／大学生310(250)円 ※ ()内は20名以上の団体

[縮景園共通券] 一般610円／大学生350円 ※特別展は別料金

※当館で開催中の特別展入館券にて無料でご覧いただけます。

※高校生以下、障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料(1階総合受付でお申し出ください)。



広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

<http://www.hpam.jp/>

〒730-0014 広島市中区上本町2-22 TEL.082-221-8246 FAX.082-223-1441



press release

【概要】

夏の所蔵作品展

サマーミュージアム 美術館の七不思議

1968(昭和43)年に開館した広島県立美術館は、1996(平成8)年に現在の建物に生まれ変わり、昨年は開館50周年の節目を迎えることができました。

開館以来、多くの方々のご協力を得て、コレクションを充実させてきました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本およびアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

夏の所蔵作品展では、夏の特別展「追悼 水木しげる ゲゲゲの人生展」に触発されて、「美術館の七不思議」と題した展示をお楽しみいただきます。アジアの不思議な昔話からインスピレーションを得て制作された作品に始まり、写すこと不思議、戦後のアバンギャルド・名井万亀をはじめとする不思議な洋画、不思議な風景を描いた日本画、精霊など人外の存在を思わせる不思議をはらんだ工芸作品など、さまざまな切り口でご紹介します。夏の特別展開幕日以降は子ども向けワークシートと併せて展示室をいっそう楽しく巡っていただきたいと思います。

【彫刻展示室】故郷の昔話を造形化した不思議な世界

《王はレダン山の王女との結婚を望んだ》という作品は1994年に広島で開催されたアジア競技大会の芸術展示として企画された「アジアの心とかたち」展で発表されたものです。「レダン山のお姫様」という翻訳で日本にも紹介されているマレーシアの伝説を題材にしています。

この物語には沢山のバリエーションがありますが、共通するストーリーは、美しいと評判のレダン山のお姫様をお嫁にしたいと思ったマラッカの王様に、お姫様が無理なお願いをして断ろうとする、ちょっと「竹取物語」に似たところのあるお話です。姫の願いをかなえるために、家来に難題を押し付け、国民を苦しめ、そして王子の命まで奪おうとした王の末路は、孤独で哀れなものだったと締めくくられます。

お姫様が王様の人柄を確かめたくて出したテストを、繁栄の絶頂にあった王様だからこそ、欲望にとらわれて間違った答えを出してしまったようにも感じられるストーリー。それは、急速に近代化が進み、物質文明化しつつある世界に向けて、他人の苦しみにも目を向けよう。豊かな時こそ優しくなろう。と、作者が発したメッセージのようにも感じられます。

さて、この作品、物語のどこをどのように描いたものなのでしょう。作品が創り出す不思議な世界に寄り添ってみると、あなただけの物語が見えてくるかもしれませんね。



ズルキフリー・B・ユソフ《王はレダン山の王女との結婚を望んだ》
1994年、木、布、金属など



press release

【第1展示室】写すことの不思議

美術作品に“生々しさ”を感じることはありますか。

マン・レイが撮影したデスマスク(死顔をかたどったもの)には、約10年前に亡くなった画家モディリアーニの相貌が生々しく写し出されています。一方、現代陶芸家の鯉江良二は、自身のライフマスク(顔をかたどったもの)を作品化しました。その様相は生者の痕跡でありつつ、どこか亡霊のように「死」を見る者に想起させます。

これらの作品を出発点としながら、この部屋では、西洋美術作品を中心に「写し取られた形態」に着目します。サルバドール・ダリの《ヴィーナスの夢》には、非現実的な世界が描かれていますが、ときに幼少期の記憶が重ねられています。マックス・エルンストの《博物誌》は、葉や木材をフロッターージュ(擦り出し)することで、素材の凹凸が転写されています。イサム・ノグチやハンス・アルプらのブロンズ彫刻は、塑像原型のかたちを写し取りながらも、原型と異なる作品性が表現されています。

日本へ写真が伝来した直後、「撮影されると魂が奪われる」という流説が生まれましたが、ここでは「写すこと」により、ときに生々しく、ときに見る者をどこか奇妙な感覚へいざなう作品たちをご紹介します。



芥川永《もどれない風(太田川2)(石膏原型)》、1974年、石膏

【第2展示室】不思議な絵を描く作家たち

みなさんは「この作家は何でこんな風に描いてしまったのだろう？」と思うような不思議な作品に出会ったことはありませんか？

この展示室には、そんな作品を集めてみました。「よく見ると何だかおかしいぞ!？」といった感じのものから、「どこもかしこも変だろ!!」という作品まで、その不思議さもさまざま。色々な“変”がご覧になれると思います。

しかし、そんな絵を描いた作家たちは、それぞれに大まじめでした。この表現でなくてはこの絵は成立しない、と思いつめて選んだ結果を画面に刻みつけ、その積み重ねが作品になったとも言えるでしょう。

こうした不思議な絵、普通に見て、その可笑しさにくすくすするだけでももちろん楽しいのですが、時代や社会の雰囲気など、その作品が描かれた背景に思いを馳せると、作品から感じる面白さはもっと大きくなることでしょう。作品のそばに貼ってある作家の略歴や作品解説も手掛かりにしなが、いつもより少し時間を掛けて作品の前に立ってみてください。初対面の作品も以前からの知り合いのように色々なことを語りかけてくれるはずです。ぜひゆっくりとお楽しみください。



名井萬亀《フットボール》1946年、油彩・画布



press release

【第3展示室】不思議な日本画

日本画の展示室では、「なんとなく不思議」な感情を呼び起こす作品を3つのテーマによってご紹介します。

まず、夜のほの暗い世界を描いた「夜の不思議」。自然の美しい風物を意味する花鳥風月、その中の一つである月は、古来より歌に詠まれ、絵にも描かれてきました。西行が「月やはものを 思はする」と歌ったように、月夜の詩情を描いた景色に静かに目を凝らし、耳を澄ませてみてはいかがでしょうか。

次に、「同じ顔の不思議」コーナーには、和高節二が描いた人物が並びます。郷里の安芸高田で農業をしながら、絵を描きつづけた和高は、農村の美しさをより理想的な美として表現することを目指しました。そのため、和高作品にはしばしば、同じ顔の人物が同一画面内に登場します。一見すると奇妙にも思われますが、それらの顔は生身の人間を越えた美しさの表現なのです。

最後に、「不思議の気配」と題したコーナーでは、児玉希望の抽象的な日本画を展示します。希望は生涯を通じて、さまざまな作風に挑戦し続けましたが、特に晩年は、水墨や彩色による抽象表現を試みています。具体的な対象をもとにしながらも、それを離れた色や形の生み出す不思議の気配を感じ取ってみてください。



児玉希望《梵唄(新水墨画十二題)》1959年、絹本墨画

【第4展示室】不可視な不可思議

見えない何かに祈ったり、見えないけれど気配を感じたり。そのような経験をしたことがある人は、少なくないのではないのでしょうか。この展示室では、当館の工芸コレクションにより、「見えない何か」の正体を2つのテーマに沿って探ってみたいと思います。

1つめのテーマは「見えない何か＝霊的な存在」です。インドネシア・バリ島の織物“グリーンシン”は悪霊から身を守ると信じられ、その布自体が神聖なものと考えられています。一方、中国南部や東南アジアに住む少数民族タイ族の布に用いられる代表的なモチーフ・菱形には精霊を呼ぶ特別な力があると言われています。霊的存在は、悪いものとみなされることもあれば、良いものとみなされることもあり、また、「道具でさえも百年経てば靈魂を宿す」という考え方があるように、器物など目に見える形となって現れることもあるようです。ここでは、悪霊、精霊にまつわる作品や、まるで靈魂を宿したような椅子や書物を象った作品を取り上げます。

2つめのテーマは「見えない何か＝私たちの感情」です。日々、いろいろな場面に接して抱く感情もまた、目には見えないものです。ここでは、悪意を持った視線(邪視)を避けると信じられている中央アジア・トルクメンのジュエリー、人間の情念を表現した陶芸作品を紹介します。

あわせて、動植物が描かれた漆芸作品も3点展示します。そこにも「見えない何か」が隠れているかもしれません。



三輪龍氣生(龍作)《面会人》1976年、陶



press release

【関連イベント】

① ワークショップ「みんなで鑑賞！不思議な美術」

学芸員が選んだいくつかの作品をみんなでお話しながら鑑賞します。それぞれが発見したこと、感じたことなどを共有しながらみることで、各作品をよりじっくりと楽しんでいただくプログラムです。

(※本プログラムにご参加の方は、なるべく事前に作品解説を読まれないことをおすすめします。既にお読みになった方でも、ご参加は可能です。)

■大人(中学生以上)向け

日時:8月10日(土)13:30～(1時間程度)

定員:14名程度

集合場所:2階所蔵作品展ロビー

■子ども(小学生以下)向け

日時:8月17日(土)13:30～(1時間程度)

定員:14名程度

集合場所:2階所蔵作品展ロビー

② 子ども向けワークシート

作品を想像力で読み解いてゆくワークシートを配布します。

③ 友の会ボランティアガイド

当館友の会ボランティアガイドが所蔵作品展についてわかりやすく解説します。

日時:平日14:00～／土日祝11:00～、14:00～(1時間程度)

場所:2階 展示室

参加料:無料

※要入館券(高校生以下無料)、申込不要

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 神内 有理

総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる